

ハリスの旋風。

本をパックしたのは、ボクが最初。
でも、

立ち読み防止とはちがうよ。

お客さんが、みんな“きれいな本”を
ほしがったから。

これをやったおかげで、

ほんとうによく本が売れたね。



生まれも育ちも七条界限。洛東中学を卒業後、大谷高校に入学。だが本人いわく、「すぐクビになった」

しかし、これでは親に面目がたない。そこで日吉ヶ丘高校に入学した友人を頼って、潜入？することを思いついた。天プラ学生、という言葉をご存知だろうか。昔、大学生でもないのに学生のフリをした人物をそう呼んだ。高校生で実践した例は聞いたことがないが、彼は本当にそれを実行したのである。

闇入先のクラスでは、生徒も教師も露骨に「怪訝な表情をみせた」そう。友人の名を拝借したというのがその友人は彼が出席していた間、何処にいたのだろうか？、突然、見知らぬヤツが大きな顔して授業にでてきたのである。しかも、この闇入者はウルさかった。なにか

といえは「先生、それ、何をいうたはるのですかあ。ちょっと意味がわかりません」大きな下声を振りあげた。

怪訝な表情どころか、現在なら絶対に通用しない行動だ。だが彼はしばらくそうやって「急場をしのいだんや」。もちろん長続きしたわけもない。が、のんびりした時代があったものだ。

彼は、バイクが好きだった。

宝ヶ池付近を走り回った、カミナリ族の後輩であった。現在の暴走族とは根本的に違うとはいうものの、それをきちんと理解できた人はほとんどいなくなつただろう。精神世界はアメリカのヒッピーに憧れたともいうが、実際にはヘルスエンジニアリング当時、アメリカにあ

った超巨大な暴走族。皮ジャン姿にハーレーダビッドソンがシンボルだったのほがビッターだったかも知れない。高校を退学処分となり、夜な夜なバイクにまたがって出かけてゆく息子を前に、父親は

「とにかく、他人をケガさしたり、迷惑をかけることだけは絶対に許さん。その自覚と責任をおまえが負える範囲で好きなことやれ。保険もいちはんこついつい保証のものを、自分で稼いで支払うんやん」

それから彼は働きはじめた。

ガソリンスタンド、竹材店、葬儀社、自動車会社の整備工...というわけか短期間でつぎつぎと職場がかわった。喫茶店の屋根裏で、あぐらをかいていたとき、父親が新聞の求人欄をもつてやってきた。親父が指差すところ

には、明治屋と駿々堂の募集広告があった。もうすぐ二十歳になる夏のことだった。

当時、井上陽水に憧れていた彼は、ものすごいカーリーヘアだったがヨースイがフォークソングのクリスマだったころの話であるそれをバツサリとカット。愛車のバイクを七条の疎水に放り込むとネクタイを締めて面接にむかった。

訪れた先は駿々堂。理由は、マンガが大好きだったからである。面接をしてくれた総務部長は、彼の愛読書をたずねた。

「最近時代モノがすすみます。忍者武芸帳やカムイ伝など、白土三平氏に注目していますね」

彼の答えに、部長氏はウムムと頷いたという。たぶん、新進の小説家とカンちがいし

コミックランドKYOTO店長 HIDEO ISHIDA

石田秀雄

な転機となった。

河原町店へ勤務した彼は、あらためて周囲の本棚をながめてタメ息をついた。「わかる本が一冊もあらへん。少女マンガをふくめ、ありとあらゆるマンガに精通していた彼にとって、専門書ばかりならば本棚は、なんともつまらない暗い場所だった。「マンガを置きたい。マンガを売ってみたい。そうしたら、もっと若いヤツもたくさん来るはずや」

駿々堂にマンガを置くなどもってのほかだといわれた。老舗の書店がマンガなど置いては活券にかかわるとも。しかし店長が不在のスキをついて、目立たないところにほんのわずか、彼はマンガのコーナーを独断で設置した。それは微々たるものだったが、店長には厳しい叱責をかけた。うなだれて反省した彼は、それでもマンガを置いてみたいと訴える。しまいには、店長も根負けした。実績があらなくれば、

即中止。その条件下ですこしづつ、すこしづつマンガのコーナーをひろげてゆく。二年、三年、四年、と時が経過するにしたがつて、扱う部数も増えていった。

たんなる趣味を越えるほどマンガに傾倒した知識を、うまく仕事に転換しつづけた彼の努力は大きい。だが、なんといっても時代が彼に味方した。現在、二千五百億円市場ともいわれるコミック単行本市場。その黎明期に大手書店が積極的販売を開始したことは、なにより「数字」をもたせて彼を強力に援護した。大手出版社が「コミックはおいしい」と力をいれはじめたころ、彼は書店単店のコミック販売実績で日本一年間で約五〇万冊にかがやっていた。昭和六〇年前後のことである。

それから、今日までの一〇年間。秋田書店

や集英社、白泉社、小学館などからの相談(重版や増版部数の決定など)を受けながら、全国で五指に入る書店店長のひとりとして、業界でも少しは知られる人物となった。やんちゃなバイク少年も、いつのまにか?課長サンである。

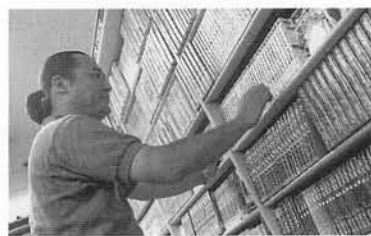
「ボクにはねえ、三人、娘がいるけれど、名前はぜんぶマンガの主人公からつけた。これは、どうしてもしてみたいことやねん」

現在、株式会社駿々堂・コミックランドKYOTOの店長である石田秀雄氏は、そつうとニヤリ、と笑った。

文/三村 溪
写真/小笠原 圭彦

PROFILE

京都市出身。昭和二十九年十二月十六日生まれ。七条生まれの七条育ち。現在の住まいも七条界限。(株)駿々堂にコミック販売部門を拓いた先駆者として、業界では有名な人物。昭和六〇年前後には、単店販売実績日本一を達成したことも、大手出版社がコミックの増刷などを相談する、全国五大コミック販売書店・店長のひとりでもある。自宅の蔵書(コミック)は、一体何冊あるのか本人にも見当がつかないとのこと。マジで古本屋が開業できるとか。家族は妻と娘が三人。現場(店)には風のように現れ、風のように去つてゆく?まだまだ若い四〇歳。



ただのどう。「ああ、あのとき、男一匹ガキ大将」やといわへんかってよかった。ノドまで出かかってんけどな」。ともかく彼は、はれて駿々堂の社員となることのできたのである。

入社してしまえばこつちのモノだ。

燃えよドラゴン、なつかしのブルース・リーが流行ったときは、店内に、「アチョーキーエーッ!」という異様な叫びが響き渡った。周囲の従業員おはさんたちには可愛がられたという彼の行動は、まさにマンガの主人公そのものであったといつてよい。最初、彼は本店勤務だったが「誰やわらんおっさん」に、バババ、バキューンと射撃のマネをして聞もなく、今はなき河原町店へ異動の辞令が出された。彼に狙撃された?おっさんは、駿々堂の社長だったのである。だが、これが大き

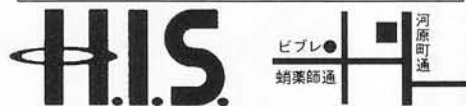
あつとおどろく旅はやっぱりHIS

YOUR JOYFUL TRAVEL



(10月関西発一例)

世界一周	●94,000円
ロサンゼルス	●71,000円
ニューヨーク	●84,000円
ヨーロッパ(パリ・ロンドン)	●89,000円
シドニー	●96,000円
デンパサル	●58,000円
バンコク	●64,000円
デリー・カトマンズ	●110,000円



河原町通
ピブル
蛸薬師通

株式会社 エイチ・アイ・エス

京都営業所 運輸大臣登録一般旅行業第724号
〒604京都市中京区河原町通蛸薬師上ル
奈良屋町293清水ビル6F

ツアー ☎075(256)5691

格安航空券 ☎075(241)2528